

《上段》

芝孝

とつざい／＼

皆様方に芝居の役

しやを皆

だれでも

ひとりとして

そつな

げいは

なし中にも

あと

にも

としよいかぶも大勢いる

けれど大人云へを

此席へてなるので

あろつ

なんと大和屋さん

美やくとちがつて

をやまはつまら

ないねへ娘子に

ちつともやれ／＼

云われないで

そつしていまでは

ほんとうのげひを

見かける人がないから

桑三郎

ほんにそうだよしかし

高嶋やさんのように

花さく春も又あらアねへ

訥升

これさ／＼田之さん又はじまつたねへ

のみすごしをするところくな事は

できなぬ

をくれよ田之助あにさん

それでも稽古シヤ

太夫本をこらんな

あのよふにひつ

ぱりだこだア

ねへそれにわたしは

吉丁めへきてから

人のうけもわるし

こじゃくにさわると

すきな酒でも

のんであばれるつもりさ

芝かん

そでは人がほんとうのきやうげんを

みわける人がない市村や山崎やの

きざまぢりをよるこぶほねッ

をるのはばか／＼し
そんなにしんぱいを
しなさんなはしかし

此若はだいぶうれてきたよ

市村

これさ／＼そうをまい方の
よふにしつこくされては

なるよほかの人の

まへもあらねへ

福助

江戸と云所は

ゑらいはで

所じやあり

がたい事工

わしも

みな様の

御ひいきにあずかるだいぶうけが
よろしいがわしはごふもせりぶが

ちつとわるいから是から

ちつとつけよぶ

もし喜佐吉さん

皆さんへよろしく

たのむそ／＼

彦三郎

なんとおなし

花方でもあア

女二やれ／＼

其れてしかし

げいではをい／＼には

いたこの林と

きれるのさ

しかし人がをれ

の事をぶたいを

ちやにしていると

いふがそつするは

づはないのだから

《中段》

小団次

なんと若者は

試合だよもつ

わしのようになるとかな

わね／＼事にやしづれへが

こみ長きり

だから

そののかは

さが

ないしかし中ではあのとつりさをまへ方も

そのようにきをもみなさんな若手のつり出したものを

《下段》

もうしをや方替てにはをや方

ぐらいなあいきよつものはないよ

高嶋や

さんと

ませる

いんよ

これさ／＼そふにげ

るとはをよはねへ

をまいにすみし

おねがいがあるそん

なにいやがらなくつても

いんやなこれでもかんつや村右衛門より

こぎていがきいているよ

をよしなはいよこさん

おまいなんぞに見こまれると

へびにみこまれたよふな

ものだよ）以下、退色により判読不可（

はだかになるかもしれ

ないと

長十びるき

あれさも

ちつとちか

らをいれて

おたきなさいよ

もう／＼よくつて／＼

ほかへはやり

ませんよ

たれだよう

しろつからせん

ひつぱるとわた

しがせつない

よ もふこつ

手をもつた

かうにははなす

きづかいはないと

竹松

にいさんはかう

やましいねへ

あのように

人々やれ／＼

いわれて

それと云も

げいのを

かけだよ

わたしも

はやくせい出し

てしつせい

しろう

げいしや

あれあの

ように権

チャンをあの

ようにして

いるから

こつ

ちも

まけ

ずにはん合よ

ひのき娘

およしどん

太夫元を

はなしては

いけないよ

いまにをう

ぜいきて

内へつれ

ていくからさ

市蔵

誠にお江

戸は一夜

けんぎよた

わしも

又此若

をふきに

うけもよく

なつたがもう

ひといきのしん

ぼつさどつも

あくぬけない

げいをよろこ

ぶので

ほねを

おるはり

合かないよ

高嶋やの

じいて

さいも

此前

よう／＼

うけ出したかねへ